



Title	声のカープナンのうたと出すことの美学－
Author(s)	ト田, 隆嗣
Citation	大阪大学, 1991, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37252
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	ト	だ	たか	嗣
学位の種類	文	学	博	士
学位記番号	第	9626	号	
学位授与の日付	平成3年3月26日			
学位授与の要件	文学研究科 芸術学専攻 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	声のカープナンのうたと出すことの美学—			
論文審査委員	(主査) 教授 谷村 晃 (副査) 教授 神林 恒道 助教授 山口 修			

論文内容の要旨

本論文は、ボルネオ島の内陸部に居住するプナンのうたと、それを支える感覚と思考について考察したもので、民族誌的であると同時に「民族美学」的な研究である。全体は序章と5章からなる本文と、付録1「プナン語概説」、付録2「プナン語彙集」および文献表からなる。

序論では、今日なお完全には定住していない狩猟採集民であるプナンの生活の現状を説明し、そこでのフィールドワークの状況を紹介しながら、問題の所在を明らかにし、さらにこの論文の全体の構成が示される。

第1章「うたことば」では、プナンのことばとうたの関係が論じられるとともに、うたがどのように規定され、他の音響現象と区別されているかが示される。プナンのシヌイと呼ばれるうたは、まずはことばとして位置づけられるものである。さまざまな状況、とりわけ人や動物の死に応じて、プナンのことばはかたちをかえる。豊富な食料が確保されて、人々が満ち足りたときに、声はうたという固有の形をとって発せられる。うたの音響的侧面に関わる諸要素とその概念は、それぞれをとってみればうた以外の領域にもみられることがあるが、それらがまとまって一つの形式をなすとき、それはうた以外の何物でもないものとなる。また、うたを含めたいくつかの発話の型は、状況の変化に応じて用いられることと、その型に固有の語彙、発音上の特徴などを持つ点で、日常の言語とは区別される。それは人や動物の死と関連し、したがってプナンのカミの世界と密接につながっている。

さらに、人間に限らず動物の喉から発せられる音声は、それ以外の音声と対立し、相補的にプナンの音響世界全体を構成する。喉から発せられる音声は、人や動物とカミとの協力や対立・拮抗の結果としてあらわれ、それゆえそこに人びとは「力」を感じるのに対して、それ以外の音声が「力」を持つとす

れば、それは主としてカミの介在ゆえにである。

第2章「カミ・音声・人間」では、こうしたプロンの言語運用を方向づけるカミの世界が考察される。まず、カミのメッセージを伝えるとされる鳥の鳴き声が検討される。鳥の鳴き声のあるものは、その音のパターンにプロン語をあてはめて聞くという点で、プロンの言語行動の一つと位置づけることができる。カミのことばとしての鳥の声は、プロンのことばでもある。しかもそこでは、音ことばが、彼らのうたと同じ原理に基づいて結び付けられているのである。うたが他のことばとは区別される形式上の特徴は、カミのことばを伝える鳥の鳴き声と共通する。声の表出にはさまざまなレベルで、彼らのカミ観念が関与しており、その表出のしかたはカミ観念に基づく「しきたり」なのである。こうした視点から、さらにプロンのカミの世界が記述される。それによって、言語行動を含めたプロンの諸行動の多くが、カミの存在とその認識によって方向つけられていることが明らかになる。そしてカミの存在は、鳥の声のみならずさまざまな環境音によって具体化されることを、特に、にわとりと犬の声を中心に据えて考察される。

さらに、カミの存在は人間の体内の感覚としても具体化されることが考察される。体から外へ何かを出すという行為は、多くの場合そこにカミが介在し、カミは身体感覚としてその実体が感じられる。そして出すために前提される食べること、入れることは、鳥の声をプロン語として聞くことと類比的にとらえられる。猪肉はその部位ごとに妥当な調理の仕方があり、それはカミから与えられた食料を適切に体内に取り込むための作業である。そして肉やラードの有無に応じてサゴ澱粉の調理も異なる。個々の鳥の鳴き声のパターンを、それぞれ適切に聞かなければならぬのと同様に、こうした食料も適切に体内に取り込まねばならない。こうした考え方のゆえに、プロンは出すことと出されたものにカミと人間の力を感じ、それを前向きに評価する。

第3章「出すことの美学」では、こうした、人間の体内に外界から何かを取り込むことと、体内から外界へ出すことを中心に議論がすすめられる。食べることと排泄すること、また性行為や出産は、カミの存在を共通の基盤として、声の表現（表出）と同じ次元でとらえられている。この一見非常に場違いな話題は、しかしそれが人間の基本的な行動であり、しかもそれらをうたに結び付けて考えているというプロンの思考のあり方からすれば、とうてい無視できない領域である。プロンは、外界（自然界）から何かを体内に取り込み、それを体外に出すという循環を、鳥の鳴き声をプロン語として聞き、その聞き方と同じ原理にしたがったうたを作るというカミとのやり取りのあり方と対応させてとらえ、うたを批評するのと同じように大便や屁の音を評する。筆者は、ここにプロンの「美学」があると考える。体から外に出すものは、決して汚かったり、避けるべきものであったりはせず、むしろ評価の対象であることに注目する。

第4章「たくさんのことば、よいことば」では、「出すこと」に加えて、たくさん出すことが、ことば、特にうたの場合には重視されることから、歌詞の一例がとりあげられ、検討される。たくさん出すことが評価される前提には、うたの形式を守って出すことがある。第1章で記述された音響的側面での形式と、押韻という詩的形式である。こうした形式は、個々のうたを全体としてうたにまとめ、うたと認識せるものであり、同時にうたをそれ以外の声の表出と区別するものである。また、まずその形式によっ

て、うたは聞き手にカミを感じさせることができる。この点で、うたはそのあり方（かたち）自体に意味をもち、そこにうたの力の源泉を求めることができる。

カミは鳥の声をはじめ、さまざまな媒体によってその存在や意向をあらわすが、しかしカミ固有の身体を持たないがゆえに、人間のことばをなかなか受けとめてくれない。そのため、人間は常にカミに対して声を発する必要がある。特にうたでは、たくさんのことばを発すること、長時間歌うことが重要である。そして、出すことに関するプナンの考え方を了解した上でうたをとらえなおしてみると、大便には大便の、屁には屁の固有のかたちがあると同時にその細部は人により時により、多様であること、そしてその細部が評価の対象として重要であることがわかると同時に、うたの場合との関係がよりよく見通せるようになる。こうした観点から、うた固有のかたちにのっとってたくさんの声を出すこと、歌い手の独自性がとりわけ感じられる音の動きの細部、そして歌詞の内容の展開が、うたの評価にとって中心的な要素であり、それが人の情動を喚起し、またカミに対しても力を持つ根拠であることがわかるのである。

最後に第5章「声の力」では、とりあえず「美学」と呼ばれたプナンの「出すこと」に関わる感覚と思考について検討される。彼らにとって歌うことと排泄とは、カミの存在を前提として、同一の地平に置かれている。そのそれぞれがその独自のあり方によって特徴づけられるが、うたの場合、その形式と、それが示すカミの世界および生と死のイメージとが、その力をより強化している。筆者は、研究者にとって知的な理解よりもさらに大切なことは、そうした力をそこに経験し感じることであるという。そしてこのような感覚を共有する事によって、プナンのうたと出すことに関わる思考が、既存の美学とは違うかもしれない意味での、一種の新しい美学としてとらえることができるはずであるとする。こうしてプナンのうたは、人びとにとって表面的にはどうでもよいものでありながら、実は人間存在にとってきわめて重い意味を持つものであることが了解できるとする。

本文に統いてプナン語概説とプナン語彙集が付されているが、この分野での初めての作業として、資料的に評価される。

本文 183ページ（1ページ：30字×32行）。400字詰原稿用紙換算約440枚。付録1－2 71ページ（400字×約170枚）。参考文献10ページ（400字×約22枚）。

論文審査の結果の要旨

本論文はボルネオ島の内陸部、マレーシア連邦サラワク州カピット省のプラガ川源流地域を中心とするフィールドワークに基づいて、同地域に居住する狩猟採集民であるプナンのうたと、それを支える感覚と思考について考察したきわめてユニークな民族誌的、民族美学的研究である。プナンは、今なお生き残る数少ない非定住の狩猟採集民族として、民族学ならびに民族音楽学研究の貴重な対象の一つとされている。特にプナンのうたに関する研究は他に例を見ない貴重な研究であり、その独創的な美学的視点とともに民族音楽学の研究に新たな知見を拓いたものとして高く評価される。

評価すべき第1の点は、第5章「声の力」で述べられているプナンのシヌイと呼ばれるうたについての筆者の身体論的視点からの美学的洞察の深さである。特にここでは、存在を対象化する視覚の作用に対して、個人に浸透し、伝達と参加の感覚を生み出す聴覚、嗅覚、味覚、触覚の重要性の指摘と、聴覚やその他の感覚に訴えてカミ観念を具体化するうたの働きについての論述に、十分な説得力がある。調査活動中のある夜、筆者にカミが入り込んで夢中でうたい続けた体験を通じて得られたプナンの世界の感覚的知の問題を、筆者は、ストーラーの文化人類学的視点からのメルロ＝ポンティの身体論解釈を援用して美学的に展開しているが、この記述は具体的で迫真力に富んでいる。

評価すべき第2の点は、第4章「たくさんのことば、よいことば」に見られるシヌイの歌詞のほぼ全文の収録とその形式及び内容の説明である。そこには非定住の狩猟採集民プナンのよいことばとしてのうたとその天翔ける詩がカミの声として聞こえてくる。それは狩猟採集民の民族誌資料として高く評価される。

評価すべき第3の点は、この作業の前提となるプナンの文法と語彙の研究である。それは巻末付録1「プナン概説」及び付録2「プナン語彙集」としてまとめられている。プナン語についてはこれまでまとまった研究がないため、3回に及ぶ現地調査によって作成されたこのプナン語研究は、この分野の研究者にとってかけがえのない重要な参考となるであろう。なお、本文中で筆者は、プナンのことばの翻訳に関西弁を用いるが、このユニークな発想もまたことばに対する筆者の聴覚的反応の鋭さの証明と見ることができる。

評価すべき第4の点は、従来美学、芸術学の研究対象とはならなかった排便、排尿、放屁、性交、出産などといった出すことと、そのためのいれること、食べることが人間の存在の根源に関わることとして、さらにはカミの存在の証として問題提起されたことがある。しかもそれが優美や崇高美の変種としての醜やグロテスクなものといった美的範疇論を越え、さらに、従来の視覚偏重の西欧的美学に対する「民族美学」的立場からの反論としての意味を持たせたところに、その独創性が認められる。

以上、本論文の卓越した諸点を列挙したが、その一方で本論文には若干の問題点も認められる。たとえば、考究の対象がプナンのうたに絞られたために、同地域の他の狩猟採集民や周辺の農耕民との間の文化的影響関係が必ずしも明確にされないいうらみがある。プナンのうたに見られるような感覚と思考が、本論文では人間がうたうことに対する根源的問題として普遍化されようとしているが、そのためにはより広い視野とより多くの実証が必要であろう。また、「出すことの美学」と標榜する限り、従来の西欧的美学に対する筆者の立場を鮮明にし、それに代わる民族美学の立場を論述すべきであろう。付録のプナン語概説とプナン語彙集については、マレー語系の言語との類比関係を始め、派生語の扱い等なお改善の余地があるように思われる。しかしながら、これらの点は、いずれも今後、改めて論じられるべき問題であり、きわめて精度の高い本論文の価値を損なうものではない。

以上のように、本論文は従来の研究の水準を越える優れた論考であり、音楽学、民族音楽学さらには美学の研究者としての筆者の資質を良く示しているので、文学博士（課程）の学位申請論文として十分の価値を有するものと認定する。